

## 絵本化された「ジャックのたてた家」：日本における積み上げうたの受容

著者	水間 千恵
雑誌名	川口短大紀要
巻	29
ページ	143-158
発行年	2015-12-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1354/00000206/">http://id.nii.ac.jp/1354/00000206/</a>



# 絵本化された「ジャックのたてた家」

— 日本における積み上げうたの受容 —

水 間 千 恵

## はじめに

英語わらべうた「ジャックのたてた家 (The House that Jack Built)」は、先行する詩行に次々と内容が加わって後になるほど連が長くなっていく形式の、いわゆる「積み上げうた (積み重ねうた)」の代表例として知られ、日本でも、大正時代から子ども向けに挿絵を添えて紹介されてきた (水間 128-33)。本稿では、この詩をもとにして創作された狭義の独立した絵本のうち日本語で読めるものに絞ってその特徴を確認し、児童文化の観点からわらべうたの絵本化やその翻訳をめぐる論点を明らかにしたい。

なお、原詩は口承のわらべうたであるためさまざまなバージョンが存在するが、ここでは J・O・ハリウェル (James Orchard Halliwell) やオピー夫妻 (Iona and Peter Opie) が採録した 11 連バージョンを基本形として参照する (別表 1)。これをもとにした絵本としては、ランドルフ・コールデコット (Randolph Caldecott) の作品が最も有名である。原詩の背景を視覚化することによって、テキストの添えものではない絵の力によって独自の物語を紡ぎだしたその作品は、「現代絵本の幕開けを高らかに告げる」(センダック 22) 傑作の一つに数えられている。コールデコット版自体は日本語版が出版されていないため本稿の考察対象ではないが<sup>(1)</sup>、その特徴についてはすでに別稿において詳細に論じた (水間 122-28)。したがって、ここでは、中原収一絵『ジャックのたてたいえ』、ポール・ガルドン (Paul Galdon) 絵・大庭みなこ訳『ジャックはいえをたてたとさ』(The House that Jack Built, 1961)、シムズ・タバック (Simms Taback) 作・木坂涼訳『これはジャックのたてたいえ』(This is the House that Jack Built, 2002) の 3 作品について考察する。

## 1. 中原収一の『ジャックのたてたいえ』

英語わらべうた「ジャックのたてた家」をもとにした絵本のうち、日本で最も早い時期の出版

## 別表 原詩および谷川訛と大庭訛

	①原 詩 (Halliwell 161-63; Opie 229-31)	②谷川俊太郎訳 (『マザー・グースの歌①』46-51)	③大庭みな子訳 (『ガルドン『ジャックはいえをたてたとき』5-32)
第1連	This is the house that Jack built	これはジャックのたてた いえ	ジャックは いえを たてたとき。
第2連	This is the malt That lay in the house that Jack built.	これはジャックのたてた いえに ねかせた こうじ	ばくがだ、ばくがだ、 ばくがは できた ジャックの いえで、 ジャックは いえを たてたとき。
第3連	This is the rat That ate the malt That lay in the house that Jack built.	これはジャックのたてた いえに ねかせた こうじを たべた ねずみ	ねずみだ、ねずみだ、 ねずみは かじった できた ばくがを ばくがは できた ジャックのいえで、 ジャックは いえを たてたとき。
第4連	This is the cat That killed the rat, That ate the malt That lay in the house that Jack built.	これは ジャックのたてた いえに ねかせた こうじを たべた ねずみを ころした ねこ	ねこくん、ねこくん、 ばくがを かじった ねずみを たべた、 ばくがは できた ジャックの いえで、 ジャックは いえを たてたとき。
第5連	This is the dog That worried the cat That killed the rat, That ate the malt That lay in the house that Jack built.	これは ジャックのたてた いえに ねかせた こうじを たべた ねずみを ころした ねこを いじめた いぬ	いぬくん、いぬくん、 ねずみを たべた ねこを おどした、 ねずみは かじった できた ばくがを、 ばくがは できた ジャックの いえで、 ジャックは いえを たてたとき。
第6連	This is the cow with the crumpled horn, That tossed the dog, That worried the cat That killed the rat, That ate the malt That lay in the house that Jack built.	これは ジャックのたてた いえに ねかせた こうじを たべた ねずみを ころした ねこを いじめた いぬをつきあげた ねじれたつもの むうし	めうしだ、めうしだ、 めうしは ついた まがった つので、 ねこを おどした いぬを ひとつき、 ねこは ねずみを たべたとき、 ねずみは かじった できた ばくがを、 ばくがは できた ジャックの いえで、 ジャックは いえを たてたとき。
第7連	This is the maiden all forlorn, That milked the cow with the crumpled horn, That tossed the dog, That worried the cat That killed the rat, That ate the malt That lay in the house that Jack built.	これは ジャックのたてた いえに ねかせた こうじを たべた ねずみを ころした ねこを いじめた いぬをつきあげた ねじれたつもの むうしのちをしぼった ひとりぼっちの むすめ	ひとりぼっちの むすめさん、 ミルクをしぼった むうしの ミルクを、 めうしは ついた まがった つので、 ねこを おどした いぬを ひとつき、 ねこは ねずみを たべたとき、 ねずみは かじった できた ばくがを、 ばくがは できた ジャックの いえで、 ジャックは いえを たてたとき。
第8連	This is the man all tattered and torn, That kissed the maiden all forlorn, That milked the cow with the crumpled horn, That tossed the dog, That worried the cat That killed the rat, That ate the malt That lay in the house that Jack built.	これは ジャックのたてた いえに ねかせた こうじを たべた ねずみを ころした ねこを いじめた いぬをつきあげた ねじれたつもの むうしのちをしぼった ひとりぼっちの むすめにキスした ぼろをまとった おとこ	おんぼろ まとった わかい おとこが、 ひとりぼっちの むすめに キスした、 むすめは しぼった むうしの ミルクを、 めうしは ついた まがった つので、 ねこを おどした いぬを ひとつき、 ねこは ねずみを たべたとき、 ねずみは かじった できた ばくがを、 ばくがは できた ジャックの いえで、 ジャックは いえを たてたとき。
第9連	This is the priest all shaven and shorn, That married the man all tattered and torn, That kissed the maiden all forlorn, That milked the cow with the crumpled horn, That tossed the dog, That worried the cat That killed the rat, That ate the malt That lay in the house that Jack built.	これは ジャックのたてた いえに ねかせた こうじを たべた ねずみを ころした ねこを いじめた いぬをつきあげた ねじれたつもの むうしのちをしぼった ひとりぼっちの むすめにキスした ぼろをまとった おとこをけっこんさせた つるつるあたまの ほうさん	ほうさん、ほうさん、 おひげを そって あさの おいのり、 けっこんしきで、せいしよを よんだ、 けっこんしたのは おんぼろ おとこ、 おとこは キスした さびしい むすめに、 むすめは しぼった むうしの ミルクを、 めうしは ついた まがった つので、 ねこは おどした いぬを ひとつき、 ねこは ねずみを たべたとき、 ねずみは かじった できた ばくがを、 ばくがは できた ジャックの いえで、 ジャックは いえを たてたとき。
第10連	This is the cock that crowed in the morn, That waked the priest all shaven and shorn, That married the man all tattered and torn, That kissed the maiden all forlorn, That milked the cow with the crumpled horn, That tossed the dog, That worried the cat That killed the rat, That ate the malt That lay in the house that Jack built.	これは ジャックのたてた いえに ねかせた こうじを たべた ねずみを ころした ねこを いじめた いぬをつきあげた ねじれたつもの むうしのちをしぼった ひとりぼっちの むすめキスした ぼろをまとった おとこをけっこんさせた つるつるあたまの ほうさんをおこした はやおきの おんどり	あさの おんどり コケコッコ、 ほうさん はやおき おひげを そった、 おひげを そって あさの おいのり、 けっこんしきで、せいしよを よんだ、 けっこんしたのは おんぼろ おとこ、 おとこは キスした さびしい むすめに、 むすめは しぼった むうしの ミルクを、 めうしは ついた まがった つので、 ねこは おどした いぬを ひとつき、 ねこは ねずみを たべたとき、 ねずみは かじった できた ばくがを、 ばくがは できた ジャックの いえで、 ジャックは いえを たてたとき。
第11連	This is the farmer sowing his corn, That kept the cock that crowed in the morn, That waked the priest all shaven and shorn, That married the man all tattered and torn, That kissed the maiden all forlorn, That milked the cow with the crumpled horn, That tossed the dog, That worried the cat That killed the rat, That ate the malt That lay in the house that Jack built.	これは ジャックのたてた いえに ねかせた こうじを たべた ねずみを ころした ねこを いじめた いぬをつきあげた ねじれたつもの むうしのちをしぼった ひとりぼっちの むすめにキスした ぼろをまとった おとこをけっこんさせた つるつるあたまの ほうさんをおこした はやおきの おんどりをおこした むぎのたねまく おひやくしょう	おひやくしょうさん むぎの たねまき、 たねまく むぎを おんどり つつく、 あさの おんどり コケコッコ、 ほうさん はやおき おひげを そった、 おひげを そって あさの おいのり、 けっこんしきで、せいしよを よんだ、 けっこんしたのは おんぼろ おとこ、 おとこは キスした さびしい むすめに、 むすめは しぼった むうしの ミルクを、 めうしは ついた まがった つので、 ねこは おどした いぬを ひとつき、 ねこは ねずみを たべたとき、 ねずみは かじった できた ばくがを、 ばくがは できた ジャックの いえで、 ジャックは いえを たてたとき。

物として確認できるのは、昭和44（1969）年創刊の定期刊行物「学研おはなし絵本」の1冊として1975年3月に出版された中原収一の作品である（図1）。表紙を飾る主役「ジャック」は、茶色のひげを生やしてパイプを咥えている点こそ紳士風に見えるが、黄色い幅広ベルトがついた緑色の帽子、同じ色合の短い襟付きベスト、青い幅広ズボン、茶色い革靴風の履物といった派手な服装が、おとぎ話世界のキャラクターとしての造形を感じさせる<sup>(2)</sup>。また、そんな主役を囲むように配された曲線的なモチーフが、シダや木の葉を思わせるデザインになっている点も、メルヘンチックな雰囲気を醸し出す効果をあげている。この絵本には表題紙や目次等のページが存在せず、見返し部分を含めた最初の見開きで、原詩第1連の内容が、テキストと絵によって表現されているため、表紙と物語世界との間に断絶が生じていない（図2）。ここから翻って考えると、表紙の絵は、原詩には存在しない「これは、ジャック」というテキストを想定して描かれたものであることがわかる。しかも、表紙では大工道具と資材を持っていた「ジャック」が、続く見開きページで瀟洒な家の窓をあけて半身を乗りだす姿で提示されている。これは、読者に、ページをめくるという行為を通して時の経過を体験させる仕掛けである。こうしてみると、原詩をいかにふくらませるか、絵本の特性をいかに利用するかという点で、この絵本の表紙と最初の見開きページには、中原版の独自性、すなわちこの作品の特徴が非常に強く表れていることがわかる。

最初の見開きページには、オリジナリティという面ですらに見るべきものがある。第1連を視覚化するさい、過去の多くの画家たちが、家そのものに読者の視線を誘導するような絵を描いてきたなかで、中原は、家を見開き右下部分に控えめに配し、画面全体の半分以上を、森あるいは山を思わせるようなデザインで埋めているのである。黄緑、薄緑、松葉など、暗緑色のグラデーションに黄系の色を多くとりまぜたその背景は、読者の注意を、家よりもむしろ、家を取りまく環境や季節感に向けさせる。続くページで原詩第2連の主役である“malt”を「むぎ」として、



図1 中原版 表紙

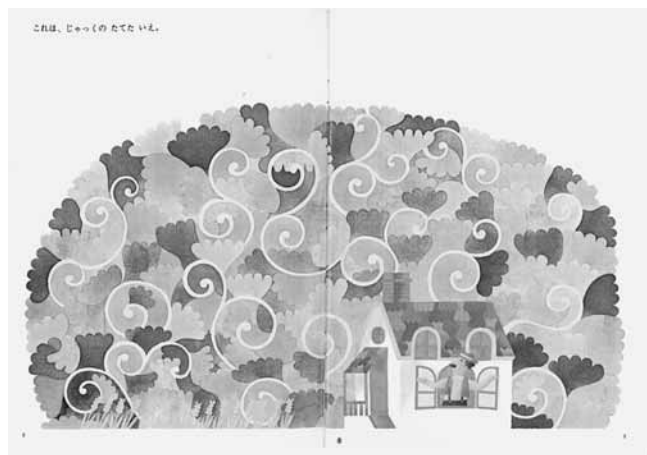


図2 中原版 pp. 2-3

風にそよぐ黄金色の麦の穂を描いたことにも同じ意図が感じられる（図3）。この見開きは上下に二分割され、上段に第2連が、下段には第3連が配されているが、第2連の訳詩の変更を受けて、第3連も「むぎを たべた ねずみ」と変更され、茎や葉のついた麦穂を1本抱えた愛嬌のある鼠が描かれている。“malt”を麦と紹介すること自体は、このわらべうたの受容史に照らせば目新しいわけではない。「モルト」にせよ「麦芽」にせよ、言葉だけでなくモノそれ自体が、日本の子どもにとってけっして身近なものでなかったことを考えれば、ある意味当然のことだろう。中原版のオリジナリティは、このことよりもむしろ、「むぎ」を、人の手が加えられたのちの「粒」や「粉」の状態ではなく、自然のなかにある状態で描いている点である。デフォルメされているとはいえ、麦畑や茎や葉のついた麦穂からは、黄葉した樹木に囲まれてひっそりと立つ小さな家のあるじ「じゃっく」の生活スタイルが伝わってくるだろう。こののち、「むぎを たべた ねずみ」「ねずみを つかまえた ねこ」「ねこを やっつけた いぬ」「いぬを つきとばした つのまがりの めうし」が次々と登場するテキストにあわせて、画面には、麦の茎を握りしめた鼠の尻尾を猫が押さえ、その猫のしっぽを犬が押さえ、その犬を牝牛が角で押す、というように、各詩行の主役となる動物たちが順に加わっていく（図4）。つまり、中川は、絵によっても積み上げうたを表現しているのである<sup>(3)</sup>。この点も、中川版の重要な個性のひとつである。

テキスト部分については、表紙に「マザー・グースより」と記載されるのみで、訳者に関する情報がない。とはいえ、これ以前に出版されている日本語訳のなかで、第6連までの訳文が中原版と完全に一致するものはない。したがって、誰がどのような経緯で訳したかは明らかでないものの、訳詩はこの絵本のために用意されたものだと考えられる。実際、第8連以降のテキストは原詩を大きくそって、独自の物語世界へと舵を切っていく。その方向転換は、第7連の主役“the maiden all forlorn”を「じゃっくのむすめ」としたことからはじまる。通常は泣き顔や憂鬱そうな表情で描かれる乳絞り娘が、この絵本では明るいメルヘン世界の住人にふさわしく、フリル付きのエプロンを身につけた愛らしい笑顔の少女となって登場する。そして、鼠、猫、犬、牝

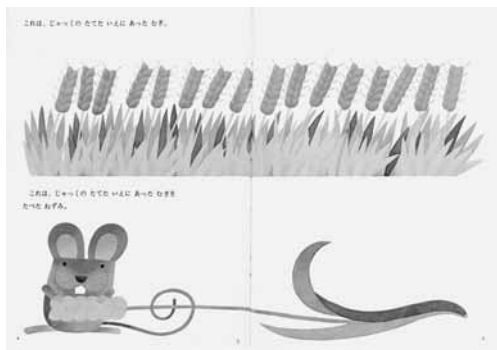


図3 中原版 pp.4-5



図4 中原版 pp.8-9

牛と一列になって、ミルクの入った桶を片手に、父親が待ち受ける家へと帰っていく場面が描かれているが、ここでは、動物たちもみな笑顔を浮かべている。それ以前に「つかまえた」り、「やつつけた」り、「つきとばした」りしたことはすっかり忘れ去られ、「じゃっく」の家族の一員であるかのように描かれているのである<sup>(4)</sup>。実り豊かな麦畑の前に、ここまで登場した全キャラクターが笑顔で勢ぞろいするこの場面は、おとぎ話の結末にふさわしい幸福感溢れるものになっている。

だが、物語はここで締め括られるわけではない。同じ見開きページの下段に、「じゃっくのとなりの いえ」が登場し、新たな物語が始まるのである（図5）。以後「ばら」「ばらに とまった ちょう」「ちょうを つかまえた かえる」「かえるに おどろいて そらを とんだ あひる」「あひるの うんだ たまごを たべた さかな」「さかなを つった じゃっくの となりの いえに すむ おとこ」が次々と加わって、独自の積み上げうたが提示されるのである。最終的には、「じゃっくのむすめ」と「じゃっくの となりの いえに すむ おとこ」の恋物語が散文で語られ、「いつまでも なかよく くらしたってさ」（26）というおとぎ話にお決まりの言葉で物語が締め括られる（図6）。

このように、愛らしい画風を活かして、英語わらべうた「ジャックのたてた家」を、メルヘン風の物語に仕立てなおしたのが中原版絵本である。直前直後の連以外とは内容上相互に強いつながりをもたず、全体として脈絡のない展開に終始していた原詩を、中川版は、第1連に登場する“Jack”に主役の地位を与え、彼を取り巻く世界のできごととして全体を再構成してみせたのである。そもそも、原詩の第8連以降は、ぼろ服の男が登場して乳絞り娘にキスをしたり、聖職者が登場してぼろ服の男を結婚させたり、因果関係や内容のつながりが希薄であるため、一貫性のある物語を紡ぐためにはこれらに手を加えることが必要になる。ことに、平面的なメルヘン画が生み出す牧歌的な雰囲気の特徴のある中原版の場合、第8連以降の内容はまったく似つかわしくない。これを削除して、代わりに独自の積み上げうたを置いたことは、絵物語としての完成度を

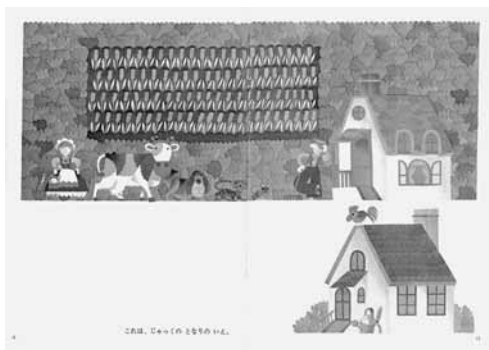


図5 中原版 pp.12-13

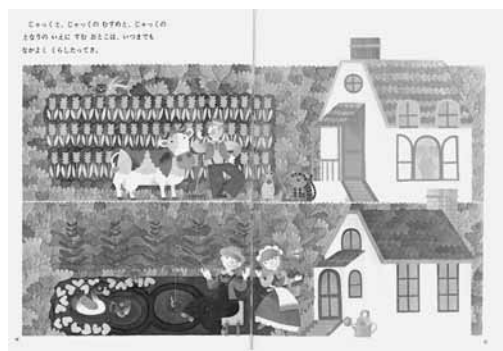


図6 中原版 pp.26-27



高めるうえで妥当な判断といえるだろう。のみならず、この変更により、わらべうたの活用例を提示したことにもなる。韻律に合わせて替えうたを作ることはわらべうたの主要な楽しみ方のひとつであり、なかでも積み上げうたの場合は、続きを自由に考えてつけたしていくのも伝統的な遊び方だからである。「ジャックのたてた家」をもとにしつつ、その替えうたや続きを考えることを促すこの絵本は、想像力だけではなく、創造力にも訴えかけるといって、わらべうた絵本のひとつの在り方を示しているのではないだろうか。

「学研おはなしえほん」が幼稚園での団体購入を通じて広く読まれたシリーズだったことを思えば、幼児のことばを育むための活動を視野におさめた編集がなされていたことは想像に難くない。その意味で、物語性を備えつつ、ことば遊びの要素を含んだ積み上げうたは、格好の素材だったはずである。中川版は、物語世界を楽しみつつ、早口言葉のように唱えてみたり、短い詩行を加える形でお話の続きを考えてみたり、さまざまな形で幼児のことばの発達を促すための活動を喚起する教材としての一面を持っているといえよう。とはいえ、視覚的には戸外で麦が実っているようすを提示しているにもかかわらず、「いえにあった」という原詩（lay in the house）を尊重したテキストを添えている点など、ことばの使い方に無頓着な面があることは否定できない。また、「じゃっくのむすめ」と「となりの いえに すむ おとこ」の恋物語の部分で、それ以前の積み上げうたとはリズムの異なる散文体になり、全体としてまとまりに欠ける印象を残すのも絵本としては残念な部分である。

## 2. ポール・ガルドンの『ジャックはいえをたてたとさ』

ポール・ガルドン（Paul Galdone）の『ジャックはいえをたてたとさ』が翻訳されたのは、マザー・グースが日本で一大ブームを巻き起こしていた 1979 年のことである（図 7）。ハンガリーに生まれ、10 代でアメリカに移り住んだガルドンは、イヴ・タイタス（Eve Titus）の作品に添



図 7 ガルドン版 表紙

えた挿絵で名をあげ、昔話を素材に用いた絵本創作で評判を確立したイラストレーターである。わらべうた「ジャックのたてた家」をもとにした絵本は、絵本作家の仕事としては比較的初期のものであるが、その後も生涯の持ち味となった、ユーモラスな表情をもつ動物たちの描きかたに、ガルドンの個性が強く表れている作品である。

この作品の表紙は、コテを使って屋根の煙突部分で作業をしている男の姿とともに、鼠、猫、犬、雄鶏をバランスよく配している<sup>(5)</sup>。表題紙には、詩行に登場する動物たちが勢ぞろいして、木陰で昼寝をしている男を眺めているようすを描きだしている（図8）。昼寝中の男の周囲には、設計図や資材や大工道具がちらばっているため、読者も、表紙や表題紙の「ジャック」が「家をたてている」最中であることをここでははっきりと認識できるはずである。表題紙には、ほかにも、詩行に登場しない栗鼠が小さく描かれているが、次ページ見開きには、さらに多くの動物たちが登場する。原詩第1連のテキストに対応するこの見開きは、表紙で描かれていた「ジャック」の作業をひいて捉えた構図になっており、狐、鹿、兎、亀、梟、鳥が遠巻きに「ジャック」の作業を見守っているようすを描いている<sup>(6)</sup>。動物たちは、家の背後に広がるなだらかな丘陵や、その合間から顔を出す擬人化された太陽とあわせて、開拓時代を想起させる設定と、昔話的な世界観を読者に伝える役割を果たしている（図9）。このように、ガルドン版は、表紙から第1連の見



図8 ガルドン版 表題紙 pp. 2-3



図9 ガルドン版 pp. 4-5



開き部分を用いて、これから始まる物語世界のイメージを読者に浸透させたのちに、原詩に沿って「ばくが」「ねずみ」「ねこ」「いぬ」「めうし」「むすめ」「おとこ」「おんどり」「ぼうさん」を順に紹介していく。

この絵本の最大の特徴は、最終連にあたる第 11 連を 5 つのパートにわけて表現している点にある。種を撒くお百姓の姿に続いて、時を作る雄鶏を笑顔で見つめる寝間着姿の聖職者、恥じらう娘に求愛するぼろ服の男、犬の顔をなめる牝牛、鼠を狙う猫という順で、全体の約 3 分の 1 にあたるページ数を割いて、それまでの内容を逆の順序でおさらいするような形になっているのである。しかも、このおさらい部分では、猫が主役になっている場面以外はすべて、長閑で和やかな情景が描かれている。これによって、最初の登場時には迷惑かと思われた行為もそうではなかったことがわかる。最初の登場時に泣いていたものの眼からは涙が消え、喧嘩していたものは仲直りしているのである。つまり、最終連を表現した複数の絵は、それ以前のページで起きていた出来事を語りなおして読者の印象を修正し、物語全体を幸福なイメージでまとめ直していることになる。そののちに、最終ページで読者の前に現れるのが、扉が開け放たれ、煙突からは煙が立ちのぼり、洗濯物が翻る「いえ」の様子であり、その前でくつろぐジャックと動物たちの姿が「めでたしめでたし」の昔話風結末を見事に演出している（図 10）。こうしてみると、最終連を視覚化した絵のなかで唯一「和解」とは無縁の存在であるかにみえた、爪を出して鼠への攻撃のチャンスをうかがう猫についても、ジャックに仇なすものに目を光らしている番人だと解釈すれば、「めでたしめでたし」の結末を阻害するどころか、むしろその立役者だといえるだろう。

このように、構成面で独自性を発揮しているガルドン版だが、絵自体の役割は、挿絵の域を大きく超えるものではない。たとえばコールデコットが絵で示したような、乳絞りの娘がなぜ泣いているのか、ぼろ服の男がなぜそのような身なりをしているのかといったことが、ガルドンの絵



図 10 ガルドン版 p. 32

からは一切伝わってこないのである。結局のところ、1枚1枚の絵が深い背景を前提に描かれておらず、相互のつながりも欠落しているため、絵だけによって独自の物語を紡いでいく力がないといわざるをえない。豊かな表情と滑稽味のある仕草によって、物語におとぎ話的雰囲気を与えている動物キャラクターを各画面にちりばめているのが、せいぜいの工夫である。泣いている乳絞り娘を同情に満ちた眼差しで見守る兎と蛙、継ぎだらけの帽子を草花で飾りたてて、浮かれた様子を見せている青年を好奇心いっぱいの表情で見つめている兎、蛙、栗鼠、小鳥、蝸牛などは、物語の展開上は全く無用の存在だが、これらの脇役によって各場面には独特のユーモアと軽みが生まれており、結果的に、作品全体の基調をなす個性の創出にもつながっている。

独立した絵本としてのさらに大きな問題点は、絵よりもテキストにある<sup>(7)</sup>。タイトルにもなっている第1連を「ジャックは いえを たてたとさ」と訳して、唱え文句のように各連の最後に置いた大庭みな子の訳詩は、それ自体は大変個性的であり、暗誦に適したリズム良さと音の響きを兼ね備えている。だが、原詩の語順を尊重しているがゆえに、詩行が重なるにつれて意味を追うことが難しくなっていくという救いがたい欠点を有しているのである。たとえば第5連のテキストは「いぬくん、いぬくん／ねずみを たべた ねこを おどした、／ねずみは かじってきた ばくがを／ばくがは できた ジャックの いえで、／ジャックは いえをたてたとさ」(12)となっているが、絵を見せながら読み聞かせたとしても子どもには意味が伝わりにくい。聞<sup>き</sup>くのではなく、読<sup>よ</sup>むとしても、意味のつながりが追いつらいことは、日本語の語順を尊重した谷川俊太郎の訳詩と比較するとよくわかる(別表②③参照)。中原版のように、絵自体が積み上げうたを表現し、登場(人)物を増やしていくようなスタイルになっていればまだしも、各連の主演のみを提示しただけの絵にこの形式のテキストが添えられると、詩行の増える後半の連になれば、大人の読者(聴き手)でさえも混乱をきたすことは間違いない。とはいえ、訳詩を英語の語順どおりにしたことは、最終連を5つのパートに分割して表現するために不可欠の決断として十分に理解できる。英語の語順通りになっていなければ、第11連を細切れにしても、5分割された絵とちぐはぐなテキストをあわせざるをえないからである。最終連の分割は、この絵本最大の個性にして長所でもあることから、これを活かすために最大限の努力を払った結果、日本語としてわかりにくさが生じてしまったということであろう。絵本翻訳の難しさを示す事例として参考になるが、実は、次にとりあげるタバック版もよく似た問題を抱えている。

### 3. シムズ・タバックの『これはジャックのたてたいえ』

英語圏ではガルドン版が出版された1961年以降もこの詩をもとにした絵本が連綿と出版されているが、そのなかで、ブロンクス生まれのユダヤ系アメリカ人シムズ・タバック(Simms

Taback) の手になる独創的な絵本が日本に紹介されている (図 11)。タバック版の特徴は、テキスト自体を絵の一部として取り込み、ことばの意味よりもむしろ、テキスト部分を含めた絵そのものに読者の注意を惹きつけ、細部にこだわりながら絵自体を読むことの面白さを訴えかけている点にある。実は、タバックはこの作品に先立って、アメリカ生まれの積み上げうたをもとにした仕掛け絵本『ハエをのみこんだおばあさん』(There Was an Old Lady who Swallowed a Fly, 1997) を発表しており、そこで試みた表現手法を『これはジャックのたてたいえ』でも活用している。

この絵本の基本的な構成は、左側でインパクトのある 1 枚絵による各連の主要紹介を行い、右側で積み重なって伸びていく物語紹介を行うというもので、テキストも両方のページに配している。各テキストは、字体、大きさ、配置、色などが不統一なままに置かれ、絵についてもわざと均衡を崩した構図で描かれ、配置されている。つまり、左ページには歪んだ家、鼻の曲がったねずみ、胴体と首が異なる方向を向いた猫、左右異なる模様の眼をした犬などが置かれ、右ページにはそれらの絵が文字と一緒に大きさの比例などお構いなしに様々な向きで詰め込まれていくという具合である。水彩絵の具、グワッシュ、色鉛筆、インクを取り混ぜて、コラージュを駆使した絵は、そもそも秩序や統一感とは無縁である。それが大小様々な文字と並ぶことによって、雑駁な印象はさらに強くなる。見開き左ページには、主役だけでなく主役に関連するさまざまなものが描かれているが、それらの一つひとつに文字が印刷されており、これらを読んでいくことで楽しさがさらに広がる。たとえば、第 6 連部分では、牝牛の体に数多くの小さなラベルが貼られている (図 12)。それらは、一見、食肉としての部位名のようなものであるが、よくみると、なかには「ミートボール」「ギュードン」「ハンバーガー」「ダブルチーズバーガー」「ちぶさ」「にゅうとう」といったことばが紛れこんでいる<sup>(8)</sup>。牝牛の足元には、乳絞りの途中で絞り手が急に姿を消した



図 11 タバック版 表紙

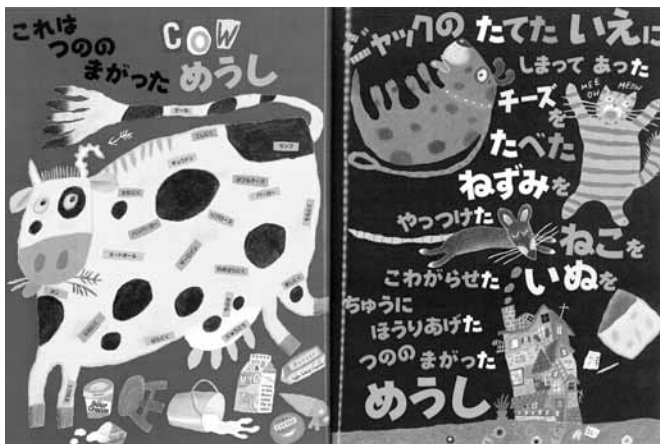


図 12 タバック版 pp. 13-14

かのように腰掛が転がり、倒れたバケツからはミルクがこぼれ出している。そのうえ、乳製品（牛乳、チーズ、バター、アイスクリーム、サワークリーム、ヨーグルト）が、明らかに不自然な大きさに描かれているのである。ここで読者に促されているのは、連続した意味やストーリーを想像／創造することではなく、分断され細分化された絵の要素一つひとつの面白さを味わうことである。このような作品のコンセプトは、表紙の見返し部分に多様な売り家とその新聞広告（らしきもの）をずらり並べたり、裏表紙に様々な大工道具を値段とセールスキャッチ入りで並べたりしていることにも象徴されている。

解釈を拒み、絵自体を楽しませようとする画家の姿勢は、原詩を読む者が最初に出会う謎「ジャックとは誰か」という問題の処理方法にもはっきりと示されている。原詩をもとに絵を描く画家が最初に決めねばならないのは、ジャックは家を実際に建てた人なのか、あるいはオーナーなのか、またあるいは両者を兼ねているのか、という点である。画家たちの解釈はそれぞれ多様であり、また彼らの絵をみた読者の解釈自体もわかれることがある。タバックは第1連に対応する見開き左ページに描いた家に、売り家であることを示す看板を添えるとともに家の扉に鍵の預かり先としてジャックの名を記しつつ、右ページでは大工らしき身なりの人物の体部分だけを書いている。しかも、この人物の服と、最終ページで売約済みであることを知らせる札が建った家のなかから、チーズを放り投げている人物の服とを、同じ模様に描いているのである。だがその一方で、巻頭と巻末に掲げた登場人物紹介には「ジャック」を載せていない。つまり、顔を出さない職人風の男とジャックが同一人物であるかどうかは、全く分からないのである<sup>9)</sup>。つまり、原詩第1連に登場した“Jack”を中心に据えて一貫した物語を描こうとした中原やガルドンとは異なり、タバックは、前後の脈絡や因果関係がはっきりしない原詩のちぐはぐさを強調するような構成を選んでいるのである。要するに、タバック版は、原詩の背後にある物語を想像／創造して絵物語化するのではなく、原詩の持つ不均衡でばらばらな世界観をそのまま視覚化した絵本だといえる。

テキスト部分については、そもそも原著が第2連の“malt”と第9連の“priest”を“cheese”と“judge”に置き換えるなど、イギリスの童謡集に収録された版とは異なる部分が多い。いずれも、現代アメリカの子どもたちにとって、より身近なものやことばに置き換えられており、時代と社会の要請に応じて変化するわらべうたの特質が現れている部分でもある。日本語版のテキストは、「これはチーズ Cheese／ジャックの たてた いえに しまってた チーズ」（4-5）というように、各連の主役については原綴りをあわせて表示している。コラージュで表現したその文字が、「ことば」というよりは「記号」として日本語のなかに違和感なく収まっているのは、文字がデザインの一部として機能しているこの作品ならではのことである。また、見開き左ページで各連の主役を紹介したのちに、右ページの最後にその主役をもう一度登場させて念押しする形のその訳文は、耳で聞いていても意味がつかみやすい。暗誦に適した韻律とはいいがた

いものの、読みやすく、わかりやすい訳文である。だが、言語構造が違うため、見開き右ページに置かれた日本語テキストとそれに対応する絵の位置が、登場（人）物が増えれば増えるほどずれていく点は、絵本として救いがたい欠点とみなされてもしかたあるまい。最終連では、テキストは上から「チーズ」「ねずみ」「ねこ」「いぬ」「めうし」「むすめ」「おとこ」「さいばんかん」「おんどり」「のうふ」の順に表示されているのに、絵は真逆である。その結果、たとえば「チーズ」のテキストと絵は、ページの上下に分かれてしまっているのである（図13）。原書では、ことばと絵の登場順が一致しているため、もちろんこのような現象は生じない（図14）。この作品におけるテキストが絵の重要な一部を構成していることを考えると、これほどに大きな違いを、言語構造の違いによる避け難い事態として片づけてよいのか疑問は残る。しかも日本語版は、原書のタイポグラフィーを変更し字体やフォントにまで手を入れているのである。編集者や訳者がただ無頓着であったのか、それとも、そもそも原詩の持つちぐはぐで不均衡なイメージをそのまま視覚化した作品であるがゆえに、翻訳時に生じた視覚的な変化も、その混乱した世界観の一部として包含されうるという信念のもとに意図的に生じさせたものだったのか。真相は定かではない。

日本語版はさらに、原詩第11連のあとに、タバックが新たに付け加えた“*And this is the artist who first had drawn*”の一文を「これはいまちょうどこかいているえかき」と変換し、Artistの帽子部分にあった「誰だかあててごらん（Guess who?）」の文字と、絵の端に書かれていた「←ヒント：その人物の名前は最後の音が「フォーゲット・ミー・ノット」と韻をふんで



図13 タバック版 p. 24



図14 タバック版原著 p. 24



いるよ (←Hint: His name rhymes with ‘forget me not!’)」という文章を削除している。次ページで「ランドルフ・コールデコット」の名前をあげてヒントを補足していることからわかる通り、「えかき」のページにちりばめられたタバックの遊びは、自作がコールデコットへのオマージュであるという画家の意思表示でもあろう。だが、その遊び部分を削除した日本語版を読む限りでは、「えかき」=「タバック」としか解釈できない。その結果、日本版ではこのページでのメタフィクション性が強まり、原著にはなかった性質が新たに加わっているのである。日本における「ジャックのたてた家」というわらべうたの知名度、並びに、そのわらべうたをもとにしたランドルフ・コールデコットの絵本の知名度を考慮すれば、タバックの遊びを削った日本語版制作者たちの判断はあながち否定すべきものではないだろう。但し、その結果、作品の本質が変わってしまっていることは動かしがたい事実である。

## おわりに

以上、英語わらべうた「ジャックのたてた家」をもとにした絵本3作品について考察してきたが、メルヘンチックな物語世界を設定しテキストの後半を自作の詩におきかえた中原版、最終連を分割し絵に幸福な物語を紡がせることによってハッピーエンドの昔話に仕立てたガルドン版、そして、さまざまな手法と素材を取り混ぜた絵の力でナンセンスの魅力を伝えるタバック版と、三者三様の表現があった。

そもそも、児童文化財としてのわらべうたは、共同体の文化基盤の重要な一部を構成するのみならず、子どもたちの想像力や創造力を磨き、豊かな言語能力を育む機能を有している。子どもたちはわらべうたを暗誦することで言葉のリズムや響きに慣れ親しみ、詩の背景を考えたり替えうたや続きを作ったりして遊ぶなかで、目に見えないものを空想する力や新しい表現を生み出す力を身につけることができる。本来は口承文学であり、語句や内容の自由度こそがわらべうたの身上である。絵本化にさいしてこの点を強みとできるかどうかは、ひとえに作家や画家の腕にかかっているといえるだろう。原詩をそのまま文字にして説明的な挿絵をつけるだけだとしたら、子どもがみずから想像／創造する余地を奪うことになりかねず、文字にすることで口誦に適した音のリズムや響きが消えるとすれば、わらべうたの良さは失われることになる。わらべうたの絵本化がそのようなことを意味するならば、百害あって一利なしである。本稿で考察の対象とした3作品には、わらべうたをもとにしつつも独自性を追求し、新たな価値を提供しようとする画家の意図が明確に表れていた。絵本としての完成度に違いはあるものの、少なくともこの点においては、いずれも、絵本化の意義が認められる作品だといえよう。

3作のうち、ガルドン版とタバック版には、翻訳絵本ならではの問題が顕在化していた。そも

そも、ことば遊びや押韻のような言語そのものを楽しむわらべうたの場合、それを異言語に置き換えることには大きな困難が伴う。また、わらべうたにはそれを生んだ共同体の文化が色濃く反映されているため、同じ文化的背景を持たない者が受容することには限界もある。それゆえ、外国のわらべうたの受容に際しては、語句や内容の変容性というわらべうたの本質を踏まえた自由度の高い翻訳が許容されるべきだろう。だが、わらべうたをもとにした「絵本」の場合、もはや口承文学ではなく独立した著作物であるから、その自由度にもおのずから制約が課されるはずである。言語構造の違いがあったとしても、テキストと絵の整合性を無視してよいはずもない。日本語で出版されたガルドン版とタバック版には、わらべうた絵本の翻訳をめぐる課題が凝縮されているため、両作品に触れることは、絵本という形式で外国わらべうたを受容すること、ひいては外国わらべうたを受容すること自体の意味を問い直すきっかけになるかもしれない。

「ジャックのたてた家」は、積み上げうたという形式が日本の児童文化に浸透するうえで大きな役割を果たしてきた。英語圏わらべうたは日本にも大正時代から「マザー・グース」「童謡集」等の名のもとにさかんに紹介されてきたが、この詩がそれらに高い頻度で収録されてきたからである。もともと積み上げうた自体の採録数が少ないなかで、これは特筆すべきことである。1970年代のマザー・グースブームののちに、質の高い積み上げうた絵本が次々と出版されるようになったことを考えると、「ジャックのたてた家」の受容史をその前史とみなすことは決して的外れではあるまい。なかでも、マザー・グースの翻訳で高い評価を受けた谷川俊太郎が、日本語の特性を活かした積み上げうたの創作に着手したことは注目に値する。英語わらべうたに触発された詩人は、『これはのみのぴこ』で日本の子どもたちに身近な情景をユーモラスに詠み、『これはおひさま』で子どもの日常を離れることなく自然界の営みを壮大に謳いあげた<sup>(10)</sup>。前者には和田誠がとぼけた味わいを、後者には大橋歩が素朴さと力強さを、それぞれの絵の力によって加えている。谷川はその後も、現代作家による積み上げうた絵本の翻訳でも力を発揮している<sup>(11)</sup>。このような日本における積み上げうた絵本の現状および、子どものことばを育むという観点での活用法については、また稿をあらためて論じることとしたい。

#### 《註》

- (1) ほるぷ社が販売したコールデコット絵本の復刻版セットにはこの作品が含まれている。但し、これはあくまで原書の復刻であり、翻訳書ではない。訳詩についても一部が別冊の解説書に収録されているにすぎない(吉田 32)。
- (2) 当時の子ども読者であれば、サスペンダー付きの幅広ズボンに金槌と板さきを手にしたその姿に、NHK 教育テレビで放映されていた幼児向け工作番組の人気キャラクター「ノッポさん」との相似性をみてとったかもしれない。
- (3) 積み上げうたであることに着目して「ジャックのたてた家」を視覚化した代表例としては、アーノルド・ローベル (Arnold Lobel) の『マザー・グース絵本』(*The Random House Book of Mother*

- Goose) を挙げることができる。詩行が加わるごとに各連の主役を画面に加えていき、最終連で彼らの動作を一挙に示して画面に変化をつけた彼の作品は、絵の力によってこの詩のもつナンセンス性と物語性を同時に表現した傑作である。ローベルは他にも積み上げうた 2 点を同書に収録している(「これは王国のかぎ (This Is the Key of the Kingdom)」「クリスマスの 1 日目 (The First Day of Christmas)」) が、いずれも原詩の内容と形式がひとめでわかるよう工夫が凝らされている。
- (4) 原詩第 4 連は “This is the cat that kill the rat” だが、中原版は “kill” の意味を意図的に弱めて「ねずみをつかまえたねこ」と表現している。
- (5) 実は、この絵本の表紙は裏表紙とひとつながりの絵になっており、牝牛も裏表紙部分に登場している。
- (6) 日本語版は無粋なことに、このページに著作権表示を入れている。また、原著では詩行 “This is the house that Jack built.” の最初の「T」を飾り柱として描くことで、テキストを絵の一部に組み込んでいたが、日本語版はこれをただ「消して」いる。その結果、画面中央に不自然な空間が生じたばかりか、柱にとまっていたはずの鳥が空中に浮いているような不自然な状態になってしまっている。絵本における「絵」あるいは「絵とテキストの関係」に配慮しない翻訳編集の好例である。
- (7) 原著のテキストは、ハリウェル及びオピー夫妻の版と比べると、第 11 連で下線部のような変更がみられる。“This is the farmer sowing his corn / That kept the cock crowed in the morn”⇒ “This is the farmer that sowed the corn / That fed the cock crowed in the morn”
- (8) 原著では “Big Mac”, “Whopper” といった商品名も入っている。
- (9) 日本語版の登場人物紹介欄に登場する「謎の男」のシルエットは、読者の混乱を助長するだろう。但し、これはそもそも、最終連として新たにつけたされた部分の主役である「えかき」を指している」と解釈すべきである。後述する通り、日本語版では削除されているものの、原著ではこの「えかき」の正体当てクイズが出題されているからである。だが、これらの情報を削除した日本語版では「謎の男」をジャックだと解釈する読者がいたとしてもしかたがない。
- (10) 前者については、谷川自身が、絵本学会第 13 回研究大会の講演で『『ジャックのたてたいえ』を真似て作った』絵本だと述べている(『絵本学会 NEWS』No. 40, 2010 年 10 月 12 日発行, 3 頁)。
- (11) 『あるげつようびのあさ』(シュルヴィッツ作), 『パパがやいたアップルパイ』(トンプソン文・ビーン絵), 『よるのいえ』(スワンソン文・クロムス絵) など。

#### 引用文献

- Caldecott, Randolph. *The House that Jack Built*. London: Routledge and Sons, 1878.
- Galdone, Paul. *The House that Jack Built*. London: Bodley Head, 1962.
- Halliwell, James Orchard, collected. *The Nursery Rhymes of England*. London: C. Richards, 1842.
- Lobel, Arnold. *The Random House Book of Mother Goose*. New York: Random House, 1986.
- Opie, Iona & Peter, ed. *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*. Oxford: OUP, 1951.
- Taback, Simms. *There Was an Old Lady Who Swallowed a Fly*. New York: Viking, 1997.
- . *This Is the House that Jack Built*. NY: G. P. Putnam's Sons, 2002.
- ガルドン, ポール『ジャックはいえをたてたとさ』, 大庭みな子訳, 東京: 佑学社, 1979 年
- シュルヴィッツ, ユリ『あるげつようびのあさ』, 谷川俊太郎訳, 東京: 徳間書店, 1994 年
- スワンソン, スーザン・マリー文, ベス・クロムス絵『よるのいえ』, 谷川俊太郎訳, 東京: 岩波書店, 2010 年
- センダック, モーリス『センダックの絵本論』, 脇明子・島多代訳, 東京: 岩波書店, 1990 年
- 谷川俊太郎ぶん・大橋歩え『これはおひさま』, 東京: 福音館書店, 1982 年
- 谷川俊太郎作・和田誠絵『これはのみのびこ』, 京都: サンリード, 1979 年
- タバック, シムズ『これはジャックのたてた家』, 木坂涼訳, 東京: フレーベル館, 2003 年

- トンプソン，ローレン文，ジョナサン・ビーン絵『パパがやいたアップルパイ』，谷川俊太郎訳，東京：ほるぷ出版，2008 年
- 中原収一『ジャックのたてたいえ』，「学研おはなしえほん」第 6 巻第 12 号，東京：学習研究社，1975 年 3 月
- 『マザー・グースのうた①』，谷川俊太郎訳，堀内誠一絵，東京：草思社，1975 年
- 水間千恵「わらべうた絵本についての考察 — 積み上げうた『ジャックのたてた家』とその挿絵」，『川口短期大学紀要』第 28 号，2014 年 12 月，121-36.
- 吉田新一「コールドコットの絵本 — 全 16 冊内容解説」『現代絵本の扉をひらく — コールドコットの絵本解説書』，東京：福音館書店，2001 年，31-95.

(提出日 2015 年 9 月 24 日)